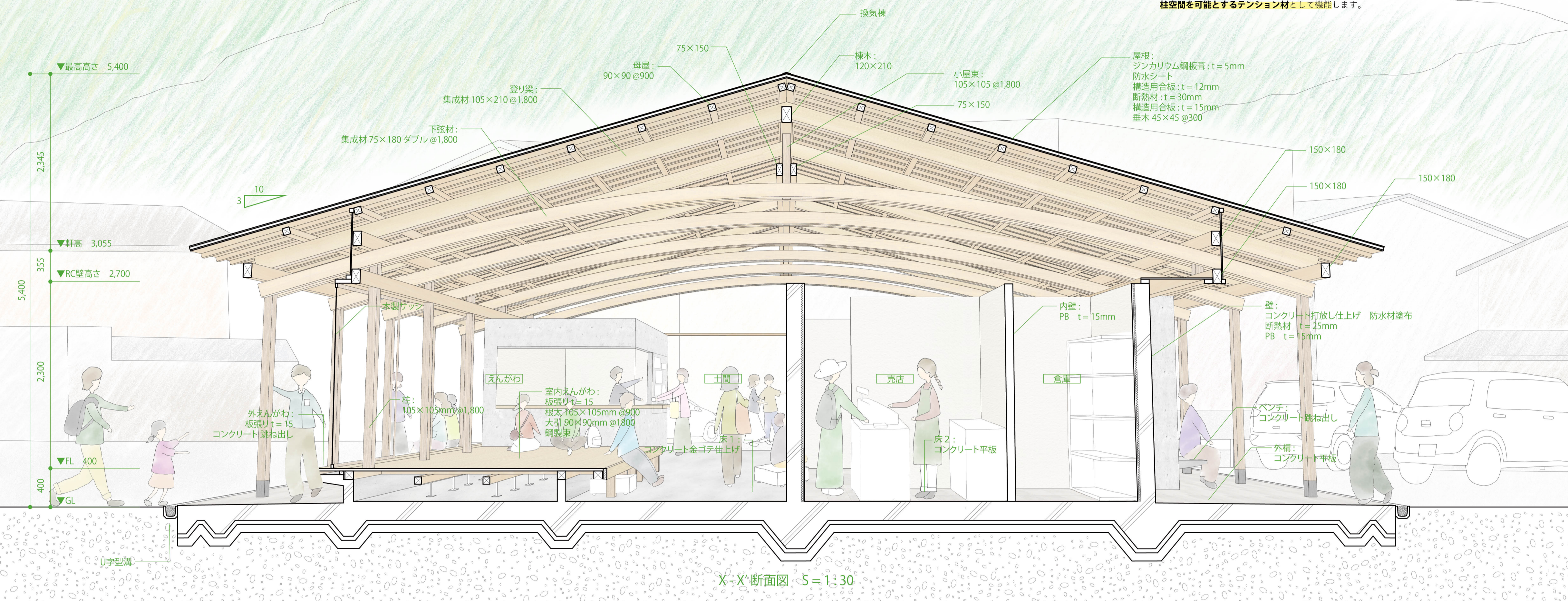
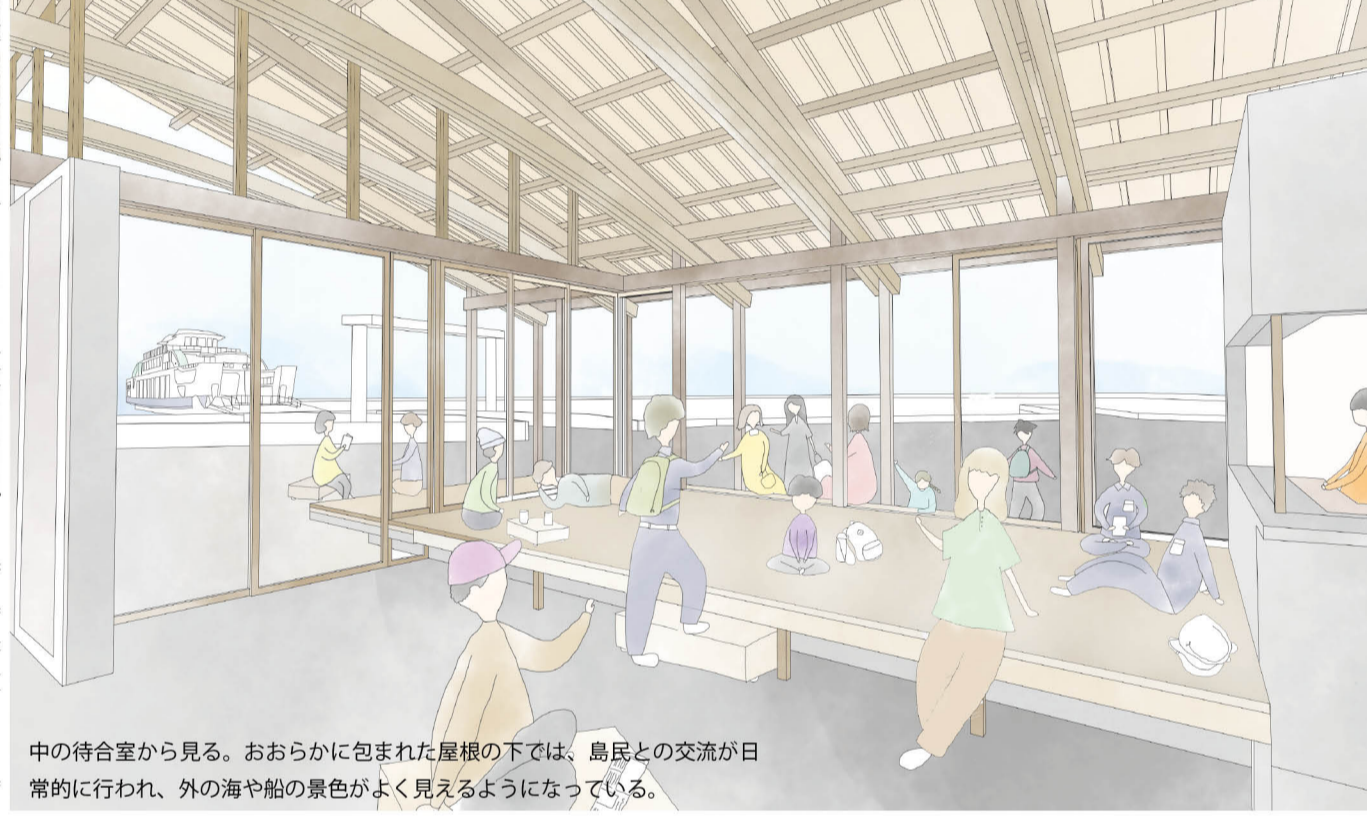
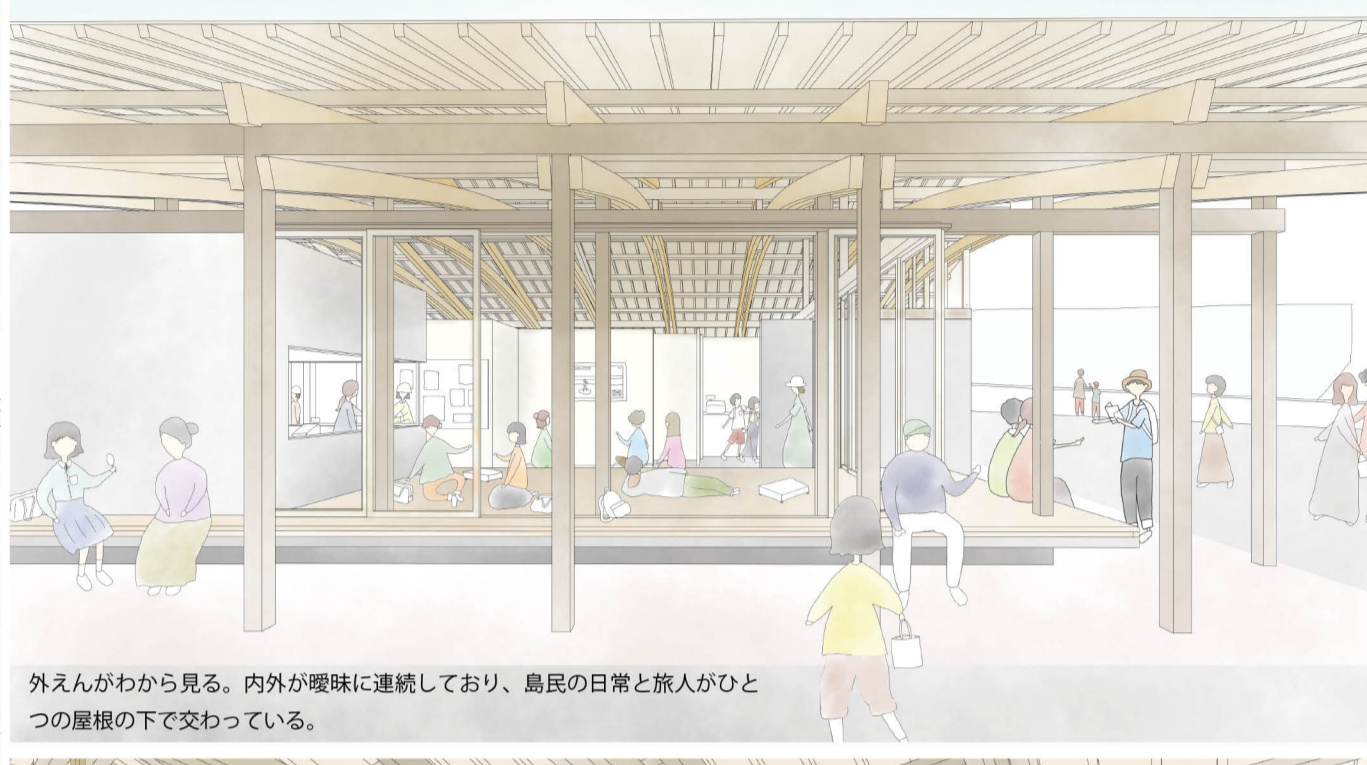


受け入れる縁側、包む屋根

大崎上島は、人口6000人を超える島でありながら、橋のかかっていない離島です。本土から切り離され、海を介して渡ってくることにより、島に帰ってきたという感覚を覚えることができます。そんな実家のような大崎上島の一員として迎え入れてくれるようなあたたかい待合所を目指します。



建築を俯瞰して見る。切妻の屋根がかかっておりその下に様々な人が集まっている。海へと妻面が伸び、方向性が生まれている。



中の待合室から見る。おおらかに包まれた屋根の下では、島民との交流が日常的に行われ、外の海や島の景色がよく見えるようになっている。

0 大西港に秘められた可能性

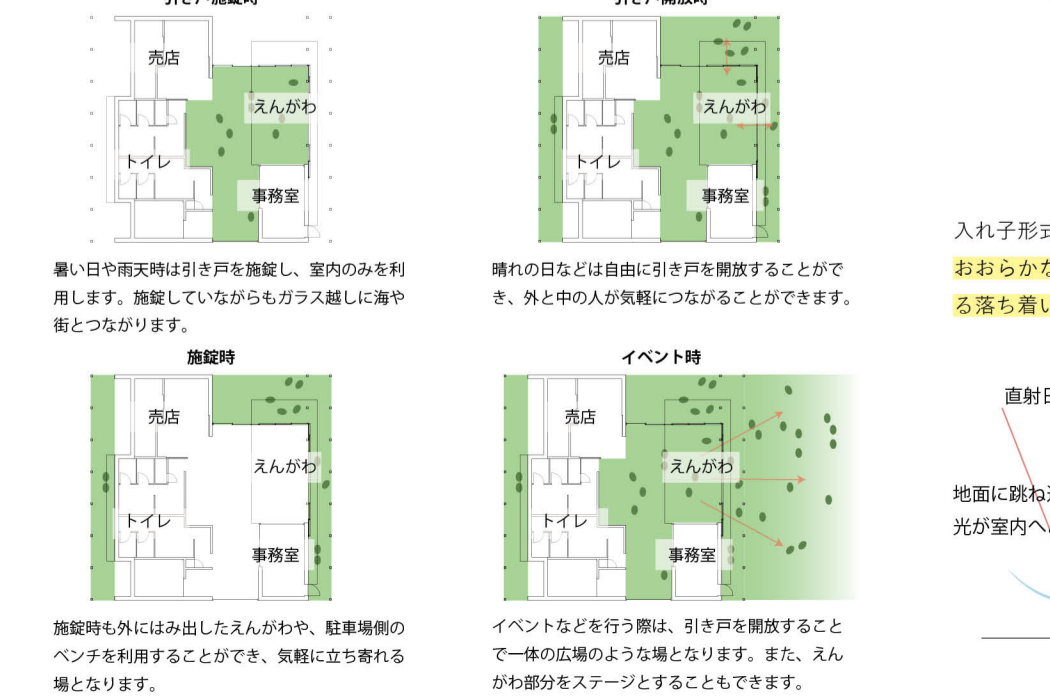
わたしたち(旅人)が大西港から大崎上島に訪れたときのことです。「こんにちは」中学生の女の子が挨拶してくれました。それは、わたしたちを島民の一員として受け入れてくれたような感覚を覚えました。一方で、島民の人たちは、大西港で帰省してくる家族を待つ間に島民同士でおしゃべりをしていました。このように大西港は、旅人が島民の暮らしと温もりを、島民同士が交流する可能性を秘めています。

1 大西港を大崎上島のえんがわへ

大崎上島には8つの港が存在し、大西港は安芸津とつながり、その他の港は竹原、愛媛とつながっています。大西港は、島民の通勤や通院で利用されることが多く、その他の港は観光地となっており、大西港に訪れる旅人は、大崎上島自体を主目的として訪れる人や、島民の家族が訪れることが多いと考えられます。そこで、これからの大西港は、旅人と島民の出会い、島民同士の交流、島民の家族の再会を受け止めるえんがわのような場所となるべきではないでしょうか。

4 一体の広場となる待合空間

面積を多く必要とするトイレと売店を西側にまとめて配置し、東側に大きなひとつの待合空間という平面構成になっています。待合空間は、えんがわにより外とつながり、引き戸を開放することで、外と一体の空間となります。このように施設からイベントまでさまざまな状況に対応することができ、常時利用することができる場となります。



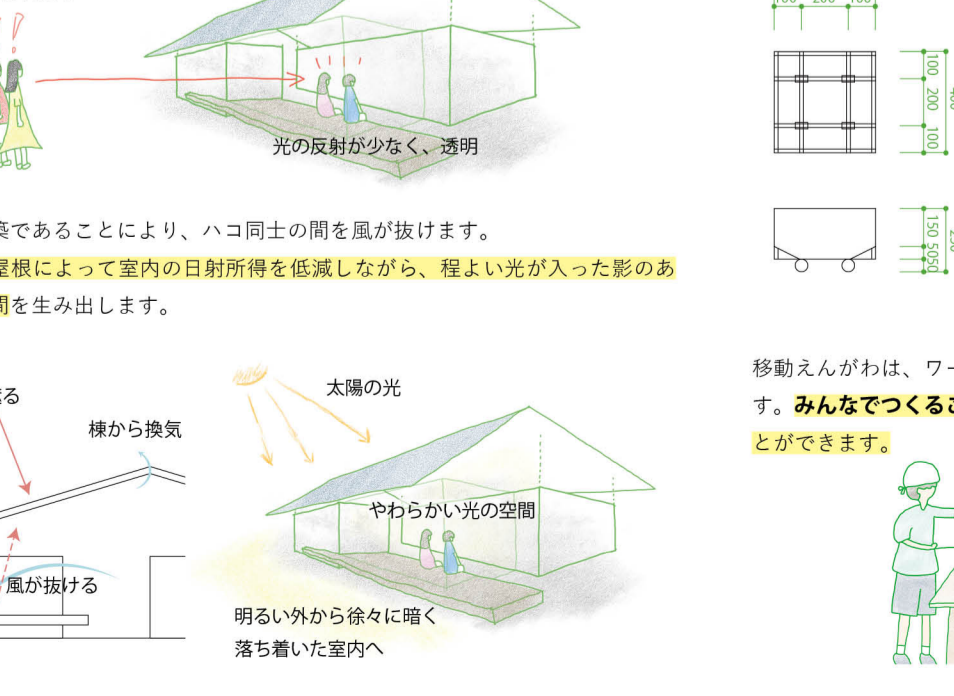
2 大西港の現状と目標



大西港は、他の港とは異なり、周辺に小学校や高校、商店街、スーパーなどがあり、暮らしがにじみ出ている地域です。さまざまな人が温もりを結ぶ結節点と言えます。そこで、登場するすべての人を受け入れられるような場所を目指します。

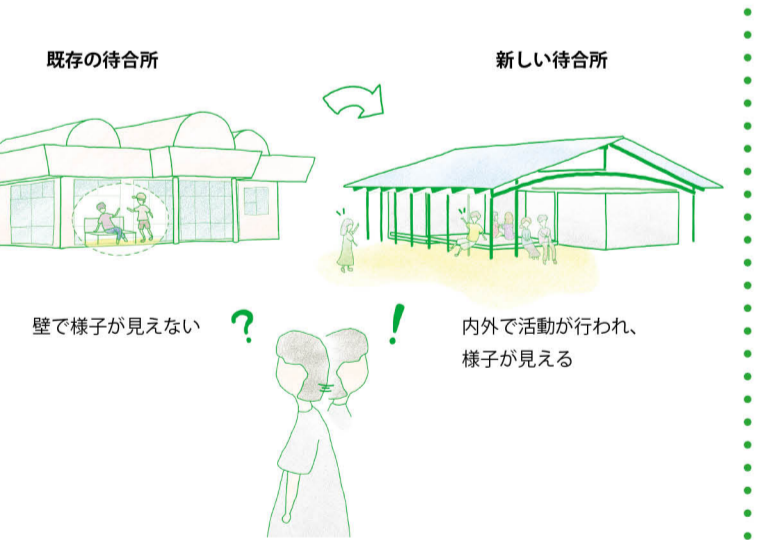
5 島とつながる入れ子形式

新待合所は、おおらかに屋根が覆う入れ子形式の建築となっています。待合空間は、おおらかな屋根によって直射日光が遮られるのでガラスの反射が少なく、中の様子がよく見えるようになり、旅人と島民、暮らしがつながります。



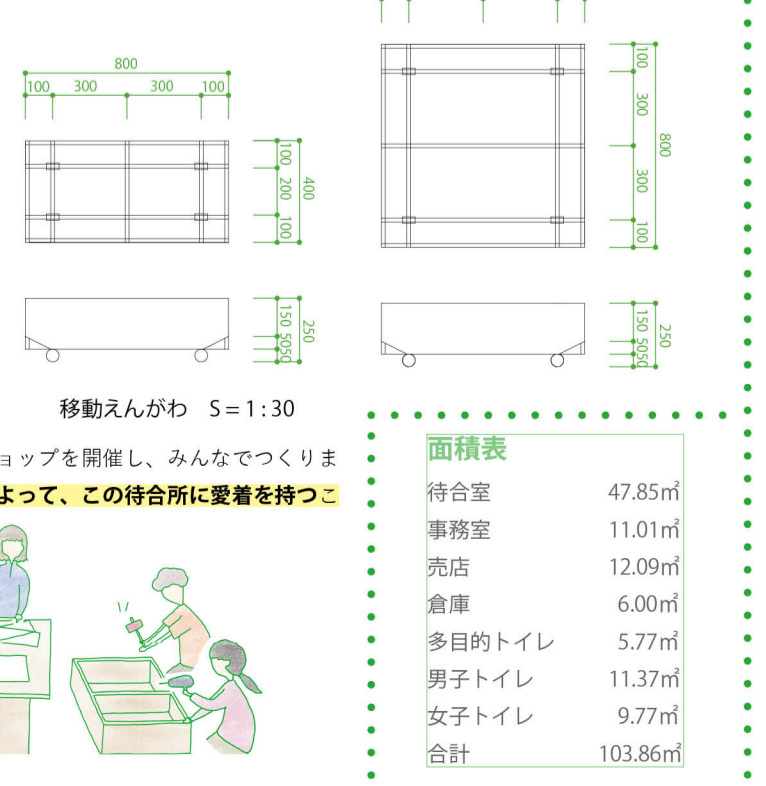
3 中間領域をもつ待合所

既存の待合所は、壁に囲まれ、中に入るまで待合所内の様子が見えず、内外のつながりがない状態となっています。そこで、多様な中間領域を持つ待合所とすることで島民も旅人もふらっと訪れやすい内外につながる待合所となります。



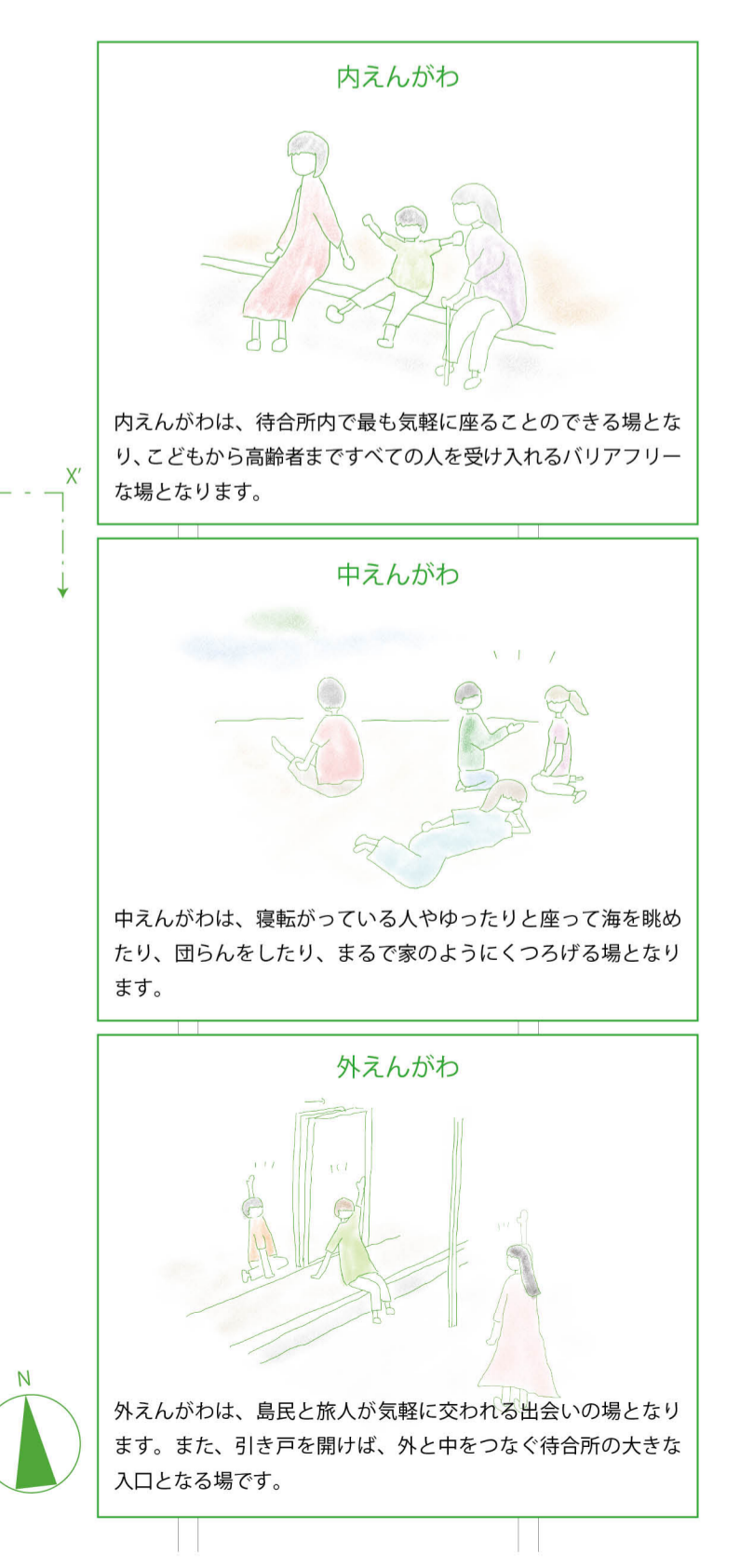
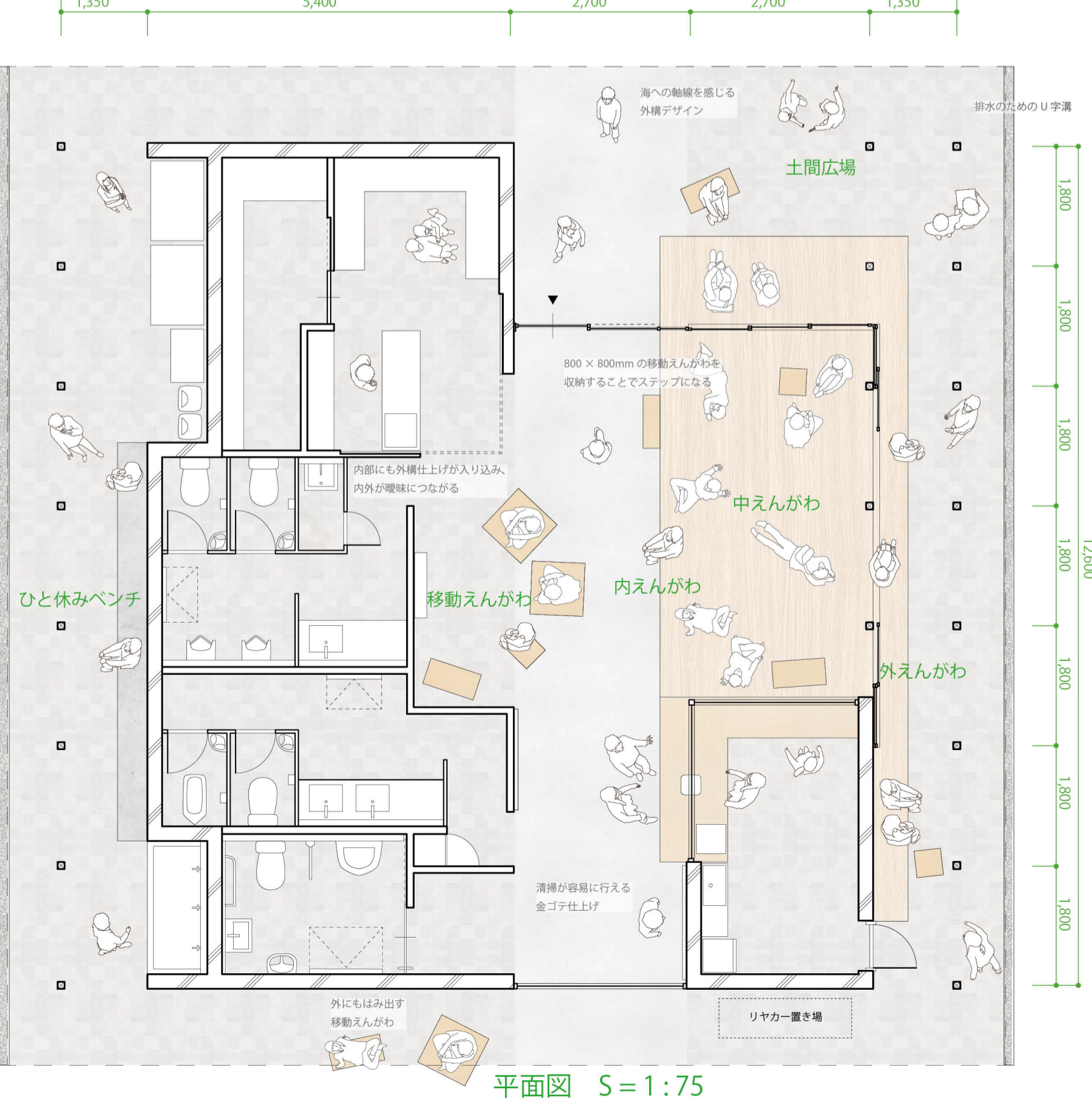
6 みんなの移動えんがわ

新待合所内は、移動えんがわを家具として使用します。移動えんがわは、外に持ち出すこともできるため、中の活動のみに留めず、多様な活動に対応します。



7 どんな人も受け入れる居場所をもつ建築

この建築では、内外につながる多様な居場所が存在しており、島民から旅人まで様々な人の活動を受け入れる事ができます。また、それぞれの居場所が連続してつながっているため、ふらっと訪れ、それぞれの人が温もり合うことのできる建築となっています。

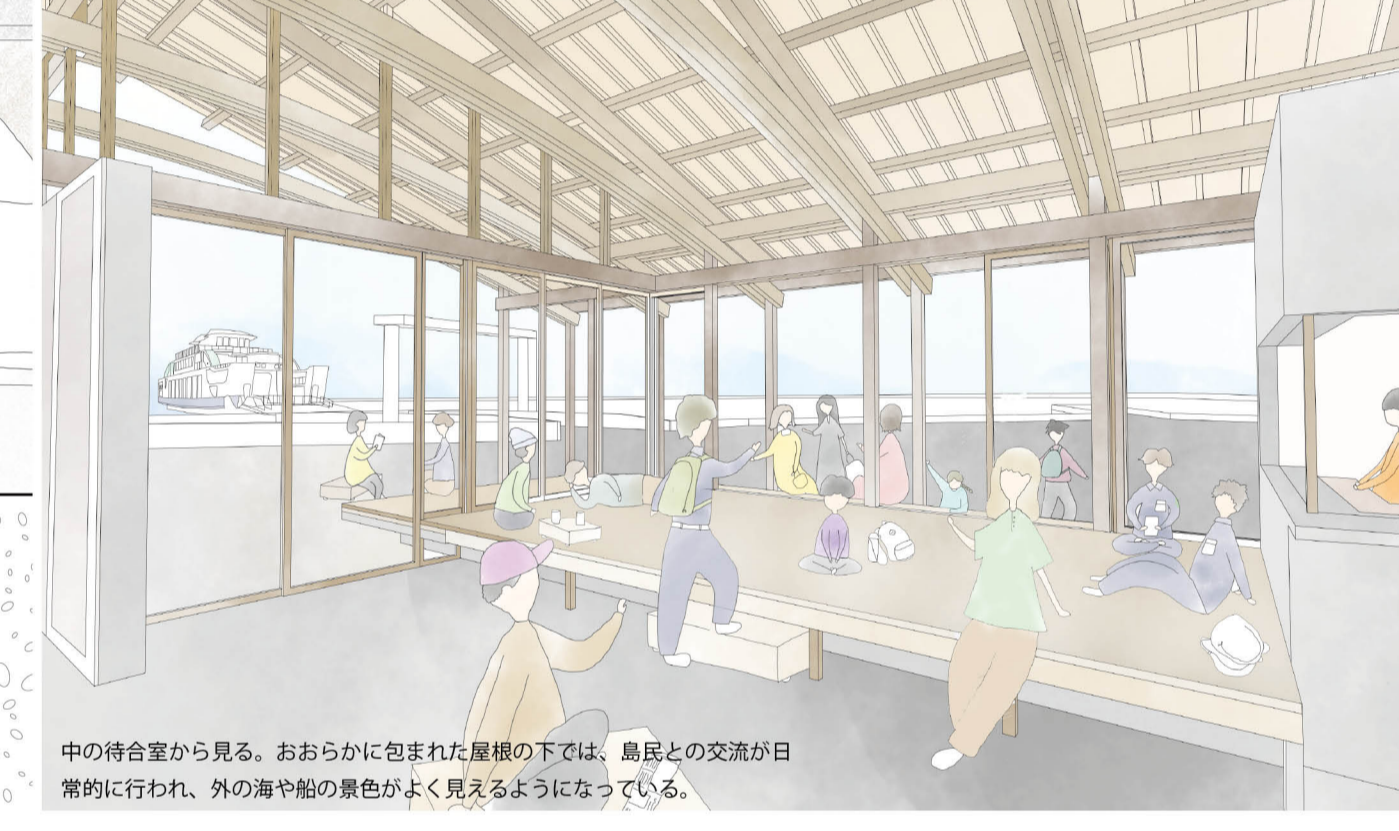


8 景色に応じる佇まい

大西港に着くと大崎上島の人々の生活とともに、自然豊かで大きな山々が広がる景色が現れます。その景色と呼応するように存在することで大西港らしい待合所となるのではないかと考えます。そこで、周辺の山々の勾配に合わせた1つの大きな屋根に島民と旅人が包まれる佇まいとしました。

9 親しみのある意匠に包まれる空間

おおらかにみんなを包む屋根は、大崎上島で歴史的に親しみのある権佐馬の意匠をモチーフとして屋根の構造体を設計しています。そうすることで、島の人々が愛着を持って利用できるような待合空間となっており、旅人は上陸してすぐに島の文化に触れることのできる建築となっています。また、無柱空間を可能とするテンション材として機能します。



この建築では、内外につながる多様な居場所が存在しており、島民から旅人まで様々な人の活動を受け入れる事ができます。また、それぞれの居場所が連続してつながっているため、ふらっと訪れ、それぞれの人が温もり合うことのできる建築となっています。

平面図 S=1:75